

日本人の蔵書志向と江戸川乱歩

紀田 順一郎

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターの所蔵になる江戸川乱歩の旧蔵書および書庫（土蔵）の価値は、単に研究資料にとどまらず、文化史上の意義においても高いものがあり、さらには現今の文化的環境について思いをめぐらす上でも、他に比類のない貴重性を備えていると思われる。

従来、日本の学者・研究者、作家は、自己の相当量の蔵書を背景に執筆活動を行うのが常識で、戦前の例では徳富蘇峰、佐々木信綱、日夏耿之介、辰野隆、南方熊楠、大佛次郎らの名がただちに思い浮かぶ。一九七一年に創設された私立図書館（公財）大宅壮一文庫は、現在七三万冊の雑誌と七万の書籍を収蔵しているが、その基礎となったのは大宅個人蔵の数万冊の雑誌であった。近年物故した山口昌男、谷沢栄一、草森紳一らも、各三、四万冊を所蔵してい

たといわれる。

江戸川乱歩の蔵書形成期は、主要部分は昭和戦前から戦後一九六〇年代までの四十年間にわたるもので、この間未曾有の社会的変動が、蔵書の内容にも大きな影響をもたらしている。中心となるのは推理小説だが、全冊数は二〇〇二年作成の目録『幻影の蔵』（新保博久・山前讓編）に収録の推理小説とその関連書四九八一冊にとどまるものではない。現在センターが把握している蔵書数は和書一三〇〇〇冊、洋書二六〇〇冊、雑誌五五〇〇冊、古典籍三五〇〇冊（八五〇点）、合計二二〇〇冊という規模となる（この数字には、寄贈書、重複書目の類は含まれていない）。

古典籍は主として近世の草双紙や男色文献だが、その他の複製・注釈本も相当の冊数に達し、とくに専門家向けの吉田幸一編「古典文庫」が一八五冊ほど収蔵されているの

は注目すべきであろう。ただし、吉田との縁が男色研究の同志である岩田準一の『男色文献書志』（一九五六）の出版を依頼したことから生じたのか、あるいはそれ以前に「古典文庫」に親しんでいたのか不明である。

もう一つ、資料本のかかなりの部分が昭和初期の円本（一冊一円の予約全集）であることは注意すべきだろう。これは本格的蔵書を志した時期が、円本ブームにびったり重なっていたせいもある。当時新進の売れっ子作家となった乱歩の、それまで抑えていた蒐書の欲求を爆発させたさまが、今日残された蔵書からも見てとれる。ちなみに当時の業界人の回想（小川菊松『出版興亡五十年』一九五三）によると、全集叢書と名がつく出版物は無慮三百数十種にのぼったというから、戦後一九六〇年代の全集ブームとは比較にならない。連日の新聞に一ページ大の予約メ切りの大広告が掲載されるという、空前絶後の出版景気であった。このような出版史上類例のない時期を、一棟の土蔵という空間にまとめた形で反映させている点、乱歩の蔵書は他に例を見ない出版文化的な意義を有するといえよう。

乱歩が購読した全集は、『明治大正文学全集』（春陽堂書店）正統六十巻をはじめ、『世界美術全集』、から『俳書大成』『フロイド精神分析学全集』にいたるまで広がり、選択

買いのようだが『国訳漢文大成』、『世界名作大観』などの定番的な書目にも目を配っているあたりは、関心の広さを示す。大佛次郎、吉川英治、小酒井不木ら同時代の作家の例に洩れず、乱歩もまた図書館型の総合的な蔵書を目指したのであろう。こうしたブームが間もなく一冊五十銭の『世界大衆文学全集』や『世界探偵小説全集』『日本探偵小説全集』ほか数種にのぼる小型版全集に移行、乱歩自身もその企画に加わったり、代表作が収録されたりするようになる。乱歩人気のすさまじさを側面から実証しているわけだが、乱歩の心理からすれば、作家的地位の上昇を目に見える形にしたものとして、自作の一卷だけにとどまらず全巻を並べるは当然といえよう。乱歩の群書志向はこのような面からも促進されたのである。

それでは、乱歩はいつごろから、このような蔵書の構築を意図したのであろうか。作家活動の過程を仔細に見ると、主として次の四期に整理されるように思われる。

①蔵書準備期

一九二五年（大正十四）の作家デビュー後、ただちに流行作家となった時期である。従来の雌伏時代に比して、手元に相当な冊数の資料を用意する必要が生じたことが考え

られるが、書物を蓄えるには何よりもスペースを必要とする。母親や妻子、それに同居人を含めた一家の居住空間も考えなければならず、少しでも多くの間取りを求めて、乱歩の苦闘がはじまる。

②蔵書形成期

一九二六年（大正十五）から翌一九二七年にかけて、牛込区（現在新宿区）筑土八幡町三二番地に居住していた時代である。『貼雑年譜』に描かれた住居平面図によれば、二階の「太郎」と注記された二畳間の隅に小さく「ホンバコ」という記載がある。はじめて書籍収納スペースが描きこまれたのであるが、一坪の書齋では蔵書の収容量にも限度があったろう。『幻影城』の巻末にある「探偵小説叢書目録」と「同雑誌目録」を見ても、この時期の刊行物に不揃いが目立つのは、収蔵の苦勞を反映している。

その後、二度の転居を経て一九三三年（昭和八）四月、芝車町八番地（現在港区高輪）の土蔵付き家屋（元質店）に移転するのであるが、再び『貼雑年譜』の平面図によれば、玄関に入って右手にある十坪ほどの土蔵を書齋兼応接間とし、南西の壁一面を「ホンダナ」とした様子が窺える。その棚を背にした乱歩の満足そうな表情の写真記事が貼り

込まれているのだが、棚には大部な資料本をズラリと並べている。

ここで思い起こされるのは、日本では伝統的に書籍の収蔵には文箱か櫃（経巻には厨子）を、大量な蔵書には置き棚をしつらえて平積みにする習慣だったことである。私は二十年ほど前に東西の珍籍を集めた南方熊楠の書庫を見学したことがあるが、整然と洋書を並列した棚と向かい合わせに、和書を積み上げた見栄えのしない棚や、『資治通鑑』などの叢書を専用の木箱に収納したものが目につき、あらためて東西の書籍の形状からくる保管方法の相違を実感したものだ。わが国によく西洋の近代的な書架が普及しはじめたのは、国民文庫刊行会などの大部の叢書が出現した大正時代以降で、それまで（あるいは昭和戦前ぐらいまで）下宿の学生などは教科書や参考書を空き箱などに詰めて保存していた。桑原武夫の回想（『文学入門』）に、「ミカン箱に岩波文庫をいっぱい所持している」などと自慢し合ったことが記されている。大正時代から昭和にかけて、本箱を全集の予約読者にサービスしたのは、まだ個人で洋式書棚を所有している者が少なかったことを示している。

乱歩にとっても「ホンバコ」から「ホンダナ」への進化こそ、書生時代、雌伏時代からの離陸を象徴するものであ

り、本格的な蔵書家としてのスタート地点だったといえよう。ここで想起さるべきは、乱歩が小酒井不木の推挽によつて「新青年」デビューを果たしたとである。その五ヶ月後（一九二五年七月）の同誌口絵には乱歩の粹入写真とともに重厚な書棚をバックにした小酒井の照影が掲載されている。「揃った本は人を誘う」（幸田文）ということば通り、もともと教養世代である乱歩が、これを見て羨望の念を抱かなかつたであろうか。

当時の日本建築の土台は、重量の大きな書庫には全く不適であったが、『探偵小説四十年』によると、たまたま車町の元土蔵暮らしが快適だったため、次の転宅にも土蔵付きを狙うこととし、奔走の末に豊島区池袋三丁目、立教大学の隣接地に注文通りの土蔵付き借家を見つけ、一九三四年（昭和九）七月より入居した。現在の旧乱歩邸である。その家の前所有者は売れっ子の経済評論家谷孫六で、建坪四十二坪半（約一四〇・二五㎡）のうち、土蔵部分は二階建ての十五坪（約四九・五㎡）、壁は厚く、窓は小さくて薄暗いが、涼しいところがよい」というので気に入ったという。

③蔵書活用期

しかし、理想の書齋と書庫も、時期がよくなかつた。間

もなく日本が臨戦体制に入り、執筆活動が徐々に制約を蒙るようになる、この整備された書庫の資料が創作面よりも、むしろ書誌的研究に資する結果となつたのはやむをえない。しかし、戦時中の休筆による余暇が、回想録（『探偵小説四十年』）の執筆をはじめ、海外ミステリ、怪奇小説研究などのほか、蔵書趣味（同性愛文献など）をも満足させるのに役立つのは幸いだった。

このほか蔵書の体系的な整備が、戦後執筆の「原始法医学書と探偵小説」、「同性愛文学史」など、『幻影城』所収の実証的論文に反映されていることは特筆されなければならない。とくに同性愛文学の研究では、少し遡るが一九三三年（昭和八）の「精神分析」に連載された「J・A・シモンズ（シモンズ）のひそかなる情熱」が乱歩作品の同性愛的テーマに深く関わっているのみならず、その客観的、美学的価値を探究した本格的論考として注目に値する。乱歩が早くから精神分析学に関心を抱いていたことは「心理試験」にも反映され、さらに一九二八年（昭和三）本邦公開の独映画『心の不思議』（G・W・パブスト監督）の合評（『新青年』一九二八・三）のさい、「精神分析の学説を入れたいのは僕だろうね」と誇っているのでもわかるが、あくまで探偵作家としての関心に過ぎなかつたように思われる。

しかし、前述の『フロイド精神分析学全集』（春陽堂書店）を一九三〇年（昭和五）以降に購読したことで、同性愛が精神分析の対象になることを知り、全集の企画者・訳者の一人大槻憲二主宰の精神分析研究会の例会に出席しはじめた（『探偵小説四十年』昭和八年の項）。

同性愛に対する精神分析的アプローチと、同性愛文学者シモンズの著書を読破する過程で（乱歩はそのためにギリシャ語を勉強している）、乱歩が自己の衝動を昇華し、一種の精神革命を経たことは、戦時から戦後にかけてのパイソナリティーの変化につながるという意味で、きわめて重要であることを指摘しておきたい。

④蔵書保守（維持）期

蔵書のための本格的なハードウェア（土蔵）を備えた直後、時代は戦時に入りました。乱歩の土蔵は温度、湿度、湿気とも個人の蔵書環境としてはほぼ合格であるから、平時なら貴重書を年に一度、虫干しする程度の手間で済んだはずだが、東京空襲の不安が現実になり、一九四五年（昭和二〇）三月十日の大空襲には焼け残ったものの、四月十三日と五月二十五日の空襲ではいずれも焼夷弾を浴び、家の一部が焼かれた。肝心の土蔵は屋根に飛んできた焼夷弾の油脂が

火を吹いたが、近所の人が屋根にのぼって消しとめた。もし突き抜けていたら、蔵書は烏有に帰したであろう。それまで乱歩は栄養失調による大腸カタルと、本を置いたまま疎開する気になれないことで東京に止まっていたが。ここにいたって真剣に蔵書疎開を考えるようになった。といっても、場所は家族のいる福島県伊達郡保原町（現、伊達市）しかない。現地で一農家の土蔵を借りたまではよかったが、戦時下では輸送のほうが大変だった。

『探偵小説四十年』には鉄道省の知り合いにお百度を踏んで、貨車一台を借り、梱包材料として米俵百俵を入手、あらかじめ新聞紙に包んだ書籍を俵に入れ、パッキングがわりのサンダラボッチをあてがったなどと記されている。これらの作業を自ら行ったのであるから、重労働であったろう。乱歩は記していないが、おそらく貨車は最寄りの国鉄池袋駅には回送してもらえなかったであろうから、運送業者に依頼し、リアカーや牛車で操車場のある駅まで運び、そこで貨車に移し替えたのであろう。戦後は同じ工程を逆に繰り返し、梱包を解き、全冊を階上の書架に戻すまでに一ヶ月かけ、ほとんど一人で行ったことになる。ひどく体調を崩していたことを考えると、その労苦は察するに余りある。同じころ、日比谷図書館の館長が、学生の力を

借りて四〇万冊の蔵書を近県に疎開させたという話があるが（金高謙二『疎開した四〇万冊の図書』二〇一三）、乱歩はこれを単独で実行したのである。

乱歩邸の本体が焼け残ったのは幸運中の幸運で、終戦直後の十二月十四日、家族とともに蔵書を貨車二両に積載し、東京にもどることができた。正確には乱歩だけ一足先に帰京、接触してくる出版社と旧作の復刊を計画し、新探偵雑誌の創刊へ向けて動き始めた。この雑誌はものにならなかったが、翌年三月末発行の旧「宝石」（岩谷書店）創刊号の口絵には、痩せてダブダブの服を着た姿ながら、背景の床の間にズラリと所蔵本（洋書および自著の初版本）を並べ、意気軒昂なところを示している。一木一草をとどめない荒廃状態の中で、すべての蔵書が無傷で残ったということとは、どれほど戦後の再出発にあたって、大きな励みとなったか、計り知れないものがある。

以後の乱歩蔵書は戦後大量に出回った仙花紙本や、進駐軍兵士の読み捨てたアメリカのポケット本などが加わり、後者は「幻影城通信」（「宝石」）や「アメリカの探偵小説」（「雄鶏通信」）などの執筆資料となり、さらに「ポケット・ミステリ」の監修・解説執筆を通じ、探偵小説の復興と定着に大きな役割を果たすことになる。

乱歩蔵書の精髓は、前述のようにデビュー時代から一九四〇年代ぐらまでの黄金時代に蒐集されたものと、戦後一九六〇年代までの数十年間の出版物にあるといつてよいだろう。晩年にかけて創作力のピークを過ぎるころには執筆資料も減少し、寄贈本の比重が高くなり、力点を置いた少年探偵団シリーズを中心としたジュヴナイルものが増加している。

しかし、乱歩蔵書の真価は探偵作家の経歴を物語る以上に、パイオニアとしての旺盛な探究心、読書欲を反映した幅広い書目により、昭和文化の一側面（大衆文化と円本）をリアルに浮かび上がらせているところであろう。この点はおそらく乱歩自身も意図しなかったところであろうが、とかく探偵小説だけに目が行きそうになるだけに、今後評価さるべき要素といえる。

乱歩の意図ということでは、恒久的な保存施設として土蔵に着目したことである。これは他の作家の遠く及ばないところで、大量の個人蔵書が、戦時をくぐり抜けて現在まで、古いものでは収蔵後八十数年を良好な状態を保っているのは。わが国では希有な例として特筆されよう。

あらためて記すまでもなく、近代日本人の蔵書志向は西洋先進国に優るとも劣らないものがあつたが、年間を通じ

て湿度が高く、地震や火災が多い上に、スペース難という悪条件が加わるがゆえに、岩崎家や五島家のような民間の富裕な蔵書家は例外として、一般には長期にわたり大量の蔵書を維持することは物理的にも経済的にも不可能に近かった。日本には作家の原稿などを所蔵する文学館や記念館は九十以上もあるが、江戸川乱歩の旧蔵書と書庫のように、個人作家の全経歴を伝える形で完璧な保存は例がない。

高度紙長期には各地に日本近代文学館（文京区駒場）をはじめ数多くの大規模な蔵書施設が誕生したが、その後約四十年を経た現在、多くが予算面での運営の困難に直面し、作家や研究者など旧蔵書の新たな受け入れも不可能となり、結果として少なからぬ冊数の蔵書が散逸に任されているのが実情である。無論、古書店などを通じての再流通も意味のないことではないが、乱歩の蔵書が散逸した場合を想像すれば、文化的損失の大きさは理解されるだろう。

乱歩の蔵書成立過程を四期に分けて考察したが、一般の例にしたがえば、さらに蔵書衰退期ないし散逸期が続くのが当然なのであるが、それを超えて多年にわたり維持された質的に高い蔵書は、すぐれた文化財・公共財というにふさわしく、さらに所蔵者の生涯と営為とが“体現”されて

いるという意味で、創作に劣らない“業績”といい得るものである。作家の全体像を窺うには蔵書に如くものなし。このことを端的に物語っているのが江戸川乱歩の旧蔵書なのである。

○本稿は二〇〇三年七月二十七日、立教大学池袋キャンパスにおける同大学江戸川乱歩記念大衆文化研究会インター主催の講演に手を入れたものです。

（作家・評論家）